河正雄コレクション　資料集　第８号

H A　　Myoung-goo

河　明求

2022 年 8 月

河正雄コレクション　資料集　第８号

河　明求

2022 年 8 月

目次

はじめに
序文　ドッケビが愛する「幸福と平和」…… 3
芸術の高みに期待する（河正雄）　…… 4
芸術が心と心、国と国をつなぐ
（須崎勝茂）　…… 6
河明求インタビュー　…… 8
河正雄コレクションとは　…… 11

Ⅰ　河明求の世界
〈ドッケビ〉シリーズ、そして古代土器研究
（河明求）　…… 14
河正雄コレクション～作品と物語～　…… 18

Ⅱ　評論
アーティスト・河明求について
（大橋博）　…… 62
「古代からの手紙」に寄せて（大橋博）　… 63
C'est quoi ça?（金主鈺）　…… 64
トッケビ達の集い（千葉成夫）　…… 67

Ⅲ　プロフィル
…… 73

【凡例】
・本書は、河正雄がコレクションした河明求作品の図録です。
・文中の敬称は省略させていただきました。
・日本で一般的に使われている「トッケビ」は、韓国では「ドッケビ」（도깨비＝Dokeabi）と呼ばれています。必ずしも一致しませんが、そのまま掲載しました。

序文　ー　ドッケビが愛する「幸福と平和」

ジャーナリスト　菊地 正志

本資料集に収録した韓国人アーティスト、河明求の〈ドッケビシリーズ〉はユニークでユーモラスな妖怪たち。粘土で作られた陶芸作品だが、河明求が子どもの頃から大好きなぬいぐるみにもよく似ている。ギョロリと丸く天を向いた目玉が愛らしい。しかし、単にかわいいだけの作品ではない。河明求の精神世界が表現されている。

「幸せ」がテーマの作品が多い。《幸せの呪文》《幸運の種》《幸せなクジラ》《幸せな亀》。タイトルこそ違うが、《白いウィザード》にも幸せの願いが込められている。「自分の考える『ドッケビ』のイメージと神秘的超能力を持っている魔法使いのイメージを融合し、皆様の幸福を祈りながら制作した」。河明求が書いた【物語】を読んで納得した。〈マスクシリーズ〉の《ＢｉＢｉ－Ｍａｓｋ》や《方相氏》も「魔よけ」の作品だ。

《回帰》の【物語】で日本と韓国の意外な共通点を知った。韓国の口伝説話に登場する「不可殺伊」は、日光東照宮の山門に彫られた「獏（バク）」と同じ霊獣ではないだろうか。共に悪夢と鉄を食べる。「国が乱れて戦争が起きれば鉄は武器に変わり、獏の食料は消え、飢えて死ぬ。獏が生きられるのは戦争のない世の中だけ。平和と軍縮のシンボルです」。そう話していた東照宮特別顧問の言葉を思い出した。ドッケビは「平和」を愛している。

亀がモチーフの《誰かのための新大陸》には「夢を持って挑戦する者」へのエールが込められている。「新大陸を見つけるための旅だったが、泳いでも大陸は現れなかった」と説明がある。私の脳裏にはウクライナからの難民や故郷を追われたディアスポラが思い浮かぶ。「誰かが新大陸の夢を見て旅に出る時のために自分が新大陸になってあげたい」。その言葉に河明求の人類愛と希望を見た。

埴輪シリーズも独創的だ。古墳時代の埴輪を通して、過去、現在、そして未来を生きる人々の心をつなぐ。鳥をモチーフにした《現代のメッセンジャー》は特に印象に残る。「古代日本と韓国で制作されて鳥形の土器のイメージと融合したイメージを構想した」。祖国韓国と日本の懸け橋となり、両国の文化・芸術交流に尽力している若手アーティスト、河明求のメッセージを感じてほしい。

２０２２年８月

きくち・まさし　埼玉新聞記者。埼玉新聞社編集局経済部長、文化くらし部長、編集委員などを歴任。1958 年生まれ。さいたま市在住。

河明求・芸術の高みに期待する

光州市立美術館名誉館長　河 正雄

１９８０年初め、私は銀座「日動画廊」で三輪龍作展を見た。ハイヒールを中心とした作品や「アムール・シリーズ」のエロチックなヌード作品など萩の伝統である「器」という世界からは異様で衝撃を受けた。

今日では靴や衣服といった日常品を焼物でそっくりそのまま作り芸術性を問うことも珍しくないが、当時はハイパーリアリズムを題材とする陶芸が、まだ日本では作品として例がなく、通俗的な面白さとは異質なものだったが先駆性を感じた。芸術の基本的な性格、本質的な芸術の重要性を新しい陶芸の潮流として受け止めた。

その時に求めた画集を長年、折りを見ては書架から紐解いていたのは、常に気にかかる作家であったからだ。

２０１４年９月２４日、２００２年に韓国の大学で「器」を中心として学び作業をしていたが、２００９年頃から韓国と日本の焼物を研究し富本憲吉や八木一夫に憧れたことから京都市立芸術大学に留学し、土という素材や陶による制作をプロセスにする作品を研究している河明求氏からメールが届いた。

> 初めまして、僕は韓国人のアーティスト、河明求と申します。自分は京都市立芸術大学という学校で勉強させて頂き、現在は埼玉の朝霞市にある丸沼芸術の森というところで制作活動を行っております。実は9月２２日から27日まで銀座の方で個展『完璧って何？？』を開催することになって、展示場まで来て頂いた写真家の高島史於さんから河さんのご紹介を頂き、失礼だとは思いながらも、挨拶のメールを送るようになりました。これから、よろしくお願いいたします。

２０１８年４月７日、「丸沼芸術の森」主催の韓国文化院ギャラリーＭ１での「朝霞－８作家の出会い」展で注視した作家だった。

そこに展示されていた彼の作品を見た時に、三輪龍作作品に抱いていた衝撃的な感覚と違う知的な感覚が甦った。時代を超えて共感共鳴する芸術世界を感じたのは良縁だったと言える。

その時、カタログに掲載されていた彼の制作論は彼の芸域に私を誘った。

> ユーモアとはただ笑うためだけのものではなく、社会通念上、言い辛いことなどをさりげなく伝えるコミュニケーション手段でもあります。そこから、ユーモアの中にこそ社会のリアリズムが隠されているのではないかと考え、制作に取り組んでいます。また、子供の頃から興味を持ち続けてきた昔話や伝説、神話などを改めて読み、調べ、作品の主題としています。それらの登場人物たちの関係や出来事は現実社会と変わりはないと感じます。そして、それが生まれた時代背景も考えると、それらの物語

は立派な歴史書でもあります。最近では特に、韓国や日本に伝わる物語を再解釈して、私達が生きるこの時代と社会を、新たな視点で共有できる空間的な装置としての作品を目標としています。

私は２０２１年１０月６日、美術評論家千葉成夫先生に彼を紹介した。

千葉成夫先生、お変わりありませんか。いつもお世話になっております。東京造形大学大学院の留学生（現在は博士課程中）河明求という作家から作品を見て貰いたいと請われ、彼の展覧会を見て参りました。とても頑張っている良い作品でした。朝霞市の「丸沼芸術の森」で10月10日までの展示ですが、先生にも是非見ていただきたく御案内します。

その展覧会で特に私の興味と関心を引いたのは、韓国と日本の持つ土地の記憶をテーマにした〈ドッケビ〉シリーズであった。以下は河明求が語る〈ドッケビ〉シリーズに籠めるテーマと想いである。

〈ドッケビ〉は呪術的な信仰の一つであり、昔から韓国の民衆により伝来され、先祖たちの生き方や感性を共感できる象徴的な存在である。韓国の伝統説話の中でよく登場する〈ドッケビ〉たちは、人間に近い形象をして超自然的な力を持つ者で、悪くて人に害を与える鬼とは違う、人間のような心を持つ親しい神として描かれている。〈ドッケビ〉は今の時代にも漫画やドラマで制作されているほど、韓国ではまだ大衆的で象徴的な存在として人々の意識の中で生きている。

自分が制作している〈ドッケビ〉も「民族大百科事典」、「三国遺事」などの歴史資料を参考にして、無邪気な顔をしている者や、個性の強い表情をしている者が多い。

権威的で重い感じの神様の姿ではなくて、変化に富む人間の感情を代弁し、見る人に親しみと共感をもたらす存在としての表現を目指している。

また、〈ドッケビ〉とともに‘時間’と‘記憶’は現在の自分の概念と制作において、とても重要なテーマになっており、人間の物理的な生命より長く存在しているものについて興味を持つようになった。

もう消えてしまった過去の人との物語や、関係性をそのまま記憶している存在は、ある偉大な歴史書よりも自分に大きな感動とインスピレーションを与えてくれている。自分が興味を持っている物とは、昔の宗教用品や芸術作品などの特殊な目的を持っていた物だけに拘らず、過去の人の痕跡が残っている日用品などその対象は幅が広い。

彼が時代を超越し、意欲的に挑戦する陶芸への無限なる可能性の成果を見たい。三輪龍作作品に重ねて、芸術の高みを超えてほしい。私だけの夢や期待だけで終わらせたくはない作家である。

芸術が心と心、国と国をつなぐ

「丸沼芸術の森」代表　須崎 勝茂

河明求さんとは２０１３年１月の大雪の日、ちょうど埼玉県立近代美術館でベン・シャーン展を開いてる時にある人の紹介で出会いました。英国留学から日本に戻った直後のことです。「韓国の作家だけど、面倒を見てくれないか」ということで「丸沼芸術の森」[1]にやって来ました。「真面目で癖がない。韓国人だか日本人だか分からないようだ」というのが第一印象でした。人柄が良く、すんなりと丸沼芸術の森に溶け込みました。

当時河明求さんは「ポケットチーフ」をイメージした陶芸作品を作っていました。次にどういう作品を作るのかと眺めていましたが、「ドッケビ」という韓国の想像上の動物をモチーフにした作品に取り組み始めました。彼は常に前向き。楽しい作品ばかりです。英国留学時代とはまったく違う。毎年のように違った新しい作品を制作しています。作家の中には同じ作品ばかり作り続けている人もいます。画商やデパートも売りやすい作品ばかりを求め、変化を好まない傾向があります。それでは作家は育ちません。芸術家というのは自分の精神状態や環境が変わっていく中で、次にどんな作品を作るのか、何を目指すのかが大事だと思います。

心と心をつなぐのが文化・芸術だと考えています。お金があるから、物があるから、良い街が出来たから、良い人が育つかと言えば必ずしもそうとは限りません。でも今の世の中は何だか、金、金、金ばかり。死んだらお金はお墓には持っていけません。私が所有している土地や会社、収集した絵画もすべて「預かりもの」だと思っています。預からせてもらえるのは地域の人が私を理解してくれているから。「恩返し」です。だから東日本大震災や熊本地震の後に、アンドリュー・ワイエス[2]の絵画を地元の美術館に無償で貸し出しました。

「日本と韓国の文化・芸術交流をやってみてはどうでしょうか。韓国と日本の懸け橋を作りましょう」。そう勧めてくれたのが河明求さんでした。ちょうどレジデンス（丸沼芸術の森にある外国人芸術家向けのアトリエ兼宿泊施設）も空いていましたし、「私が責任を持ちます」と言ってくれたので始めました。河明求さんは韓国・工芸デザイン文化振興院や東京の韓国文化院に何度も足を運び、企画段階から１人で準備しました。

毎年１２月、ソウルで開かれる韓国最大の工芸博覧会「トレンドフェア」[3]の出品ブース５００カ所以上を回り、その中から優れた作家３人を選び日本に招待します。その作家たちが３カ月間ずつ交代で丸沼芸術の森に滞在して作品を制作・発表します。２０１６年からスタートして、すでに１期５年が終了しました。この２年間はコロナ禍で中断していましたが、今年から２期（５年間）が再開します。国際交流を通して学び合い、切磋琢磨して、世界に羽ばたくような芸術家が育ってほしいと願っています。

私は河明求さんと知り合ったことで韓国の芸術家と出会うことが出来ました。河明求さんに感謝しています。それまで韓国との縁はまったくありませんでしたし、（マスコミの影響で）韓国に対してあまりいいイメージを持っていませんでした。でも実際、韓国に行ってみたら違いました。河明求さんと出会ってから毎年２回、もう２０回以上は韓国に行っています。過激な人はほんの一部だと思います。韓国の人たちはみな親切で親日家です。会えば「こんにちは」と声を掛けてくれます。

私は良い人を育てるのは環境だと思います。よい環境が生まれるのには、その地によい文化・芸術が根付いていなければならないと考えています。よい文化・芸術があることでよい環境が生まれ、そこからよい人が育ち、よい国を作るのだと思います。

今、日本と韓国の政治家同士は「けんか」をしていますが、大きく考えると、国と国をつなげるのは最後は文化・芸術、つまりは心の問題です。文化・芸術をやている人たちが国と国の懸け橋を築いていくのだと思います。ですから、これからも河明求さんには日本と韓国の懸け橋になってほしい。河明求さんを支援して育てることが、長い目で見れば、将来の日本と韓国の友好関係を築いていく。そう信じています。

（談）

すざき　かつしげ　丸沼倉庫（朝霞市）社長。「丸沼芸術の森」の創設者で代表（オーナー）。２３８点のワイエス作品をはじめ４２００点の絵画を収集し、「画家を目指す日本の学生の役立てたい」と毎年展覧会を開き、広く公開している。小中学生向けの学習塾支援、福祉作業場の支援も行っている。趣味は陶芸。１９５１年生まれ。朝霞市出身。

---

[1] 若い芸術家に廉価でアトリエを提供、支援・育成しようという社会貢献活動。1985 年に須崎勝茂氏が始めた。世界的に有名なアーティスト、村上隆氏も巣立った一人。ワイエス、ベン・シャーンらの作品からなる「丸沼コレクション」を収集、各地で展覧会を開くなど芸術文化の普及にも努めている。

[2] Andrew Wyeth(1917-2009)　20 世紀のアメリカの画家。アメリカン・リアリズムの代表的画家であり、戦前から戦後にかけてのアメリカ東部の田舎に生きる人々を、鉛筆、水彩、テンペラ、ドライブラシなどで詩情豊かに描く。また、作品中には体に障害を持つ女性や、黒人の中高年男性を描くなど、弱者に対する優しい目線も感じられる（ウキペディア）。

[3] 韓国最大の工芸イベント。工芸専門の博覧会であり、作品の流通事業のために設けられた展示会。韓国文化体育観光部が主催し、韓国工芸・デザイン文化振興院が主管する。2019 年（第 14 回）には工芸作家 1600 人の作品と 320 の工芸企業・団体が参加した。「丸沼芸術の森」チームの作家の作品が展示され、注目を集めた。

埴輪はタイムカプセル　未来を考えるきっかけに

アーティスト・河明求インタビュー

―陶芸家を目指したのは。

幼稚園の頃から絵を描くのが好きでした。近所に美大出身のお姉さんが住んでいて、個人レッスンを受けていました。当時、お姉さんからは「才能があるから続けなさい」とアドバイスを受けましたが、結局は普通科の高校に進学することとなりました。しかし、夜まで居残り自習を半ば強制された高校のシステムに嫌気が差して夜は美術の予備校に通っていました。粘土細工のように、土を揉んだり、物をくっつけたりするのが好きだったので、「自分には陶芸が合っているかも知れない」と考えました。大学は芸術デザイン学科の陶芸専科に進みました。

―なぜ日本と英国に留学したのですか。

最初はコップや皿など実用性のある陶器ばかり作っていました。しばらくして自己表現ができるオブジェを作り始めました。京都市立芸術大学（修士課程）への留学を決めたのも、京都で結成された前衛陶芸集団「走泥社」に興味があったからです。民芸運動の伝統も引き継いでいます。陶芸の近代の歴史は、韓国よりも日本の方がスムーズにつながっています。なぜなら韓国は、日本による植民地支配や朝鮮戦争などで混乱してしまいました。英国留学を希望したのは、日本の民芸運動に関わりが深いバーナード・リーチや国民的陶芸家のルーシー・リーについて学びたかったからです。

―英国留学で陶芸の表現が変化しました。

英国に留学した当時、私はかなり自信に満ちあふれていました。なぜなら、外国人なのにも関わらず京都市立芸術大学からの留学選考に選ばれ、京都市の奨学金もいただいたからです。ところが実際に英国の現代美術や陶芸に触れて、その自信がすぐに崩れました。「素材と技術だけで、形式的な作品しか作れていなかった」と反省したのです。その時から社会と自分との関係に関心を寄せた作品を作るようになりました。

例えば、「ポケットスクエア」のシリーズがそうです。紳士の国・英国ではスーツにさまざまな約束事があり、とても伝統があり形式的です。ところがポケットに差すハンカチーフだけは誰でも自由なスタイルで楽しめるのです。それに触発されてポケットスクエアを陶器で表現しました。工芸的な完璧さに対する抵抗心です。普段通りに制作した器を自由に崩し、針で無数の穴を開けてボロ雑巾のように作りかえました。

―「ドッケビシリーズ」はいつ、どのように生まれたのでしょう。

韓国の神話、伝説、昔話などから得たインスピレーションを基に、今の時代を表現したのが「ドッケビシリーズ」です。ここ「丸沼芸術の森」のアトリエで生まれました。２０１６年のある晩、深夜２時ごろのことです。テーブル前のイスに静かに座っていたら、「突然に

降りてきた」という感じです。何も考えていなかったので、自分が作った感覚さえしませんでした。姿の見えないドッケビとの対話を楽しみながら作った気がします。その時に作ったのが最初のドッケビ作品《Ｈａｅｃｈｉ・ヘチ》です。もう二度とできない作品だと思います。丸沼芸術の森に来ていなかったら、ドッケビシリーズは出来ていなかったと思います。

―ドッケビシリーズにはぬいぐるみ遊びが影響しています。

子どもの頃から動物が大好きで、ぬいぐるみ遊びが習慣になっています。犬や猫、アニメのキャラクターなど１５０匹ほどのぬいぐるみすべてに名前を付け、それぞれの性格や役割を決めています。例えば「大統領」とか「一般の市民」とか、リーダーシップをもつ者、わがままな者、弱気な者などさまざまです。１５０匹が一つのコミュニティーを形成しています。１匹でも欠けてもすぐに分かります。それぞれの個性や傾向を把握し、相手の言動を予測しながら交流と対話を楽しんでいます。実生活上でも相手の気持ちや要望を先読みして行動するようになり、コミュニケーション能力の向上にも役立っていると思います。

―ユニークなドッケビ作品が多い。

「私の大好きな食べ物は悪い権力者です」はドッケビシリーズの第２作です。権力者に対する単純な非難や批判ではなく、シンプルに笑いながら、作品と対話しながら自由に考えてもらいたいと思って作った作品です。ある政治家が展示会場でこの作品を見て、「悪い権力者は本当に食べられてしまうのか」と私に尋ねました。私は「それはあなた自身が決めることだと思います」とお答えしました。深刻なことでも、希望をもって、ポジティブに考えてほしいと願っています。怖い、グロテスクといった妖怪ではなく、ユーモラスで優しいドッケビが大好きです。

―今は東京造形大学博士課程で古代土器を研究中です。

私の母国の韓国と日本は長い歴史の中で、古代から緊密な交流を行っていました。特に古墳時代（３世紀中頃－７世紀頃）は盛んでした。朝鮮半島からの渡来人によって轆轤（ろくろ）や窰窯（ようがま）などの最新技術が導入され、日本の土器にも大きな変化がうまれました。その後、日本独特の前方後円墳が作られ、それに伴って埴輪も日本列島に広く分布したと考えられます。しかし当時はコミュニティーの在り方、国境や言語、社会的ヒエラルキー（身分制度）などにおいて、現代とは違う視点を持っていたものと思われます。それらは発掘された古代土器（土師器、須恵器、埴輪）などの遺物からしか想像することができません。古墳時代に制作された土器について分析し、古代土器に潜在している意義や造形的な特徴を、現代陶芸に生かすことが出来るか、その可能性を研究しています。古代遺物という〈かたちが語る言語〉として、現代の我々に訴えてくるものを研究しています。

―埴輪にはどんな特徴があるのですか。

古墳に立てられた埴輪には円筒埴輪と形象埴輪の２種類があります。形象埴輪は人物、動物、器物などをかたどった人物埴輪、動物埴輪、家形埴輪、器財埴輪に分けられます。特に

群馬県太田市飯塚町の長良神社境内で出土した国宝「埴輪武装男子立像（挂甲の武人）」は有名です。造形的な特徴としては、（１）内部が空洞で垂直的な円筒形、（２）開けられた孔（穴）がある、という二つのポイントがあると考えています。垂直的な形は地面（人間）から天（神）へ向かうイメージを内在していることの象徴で、人物の目や口などに「開けられた孔」には、何らかのエネルギーを外部から「受容」し、内部の空間を介して再び外部に「放射」する存在だと捉えています。

―その埴輪がどのように現代陶芸に活用できるのですか。

本来実用性を持っている土器から始まり、当時の儀礼や祭祀の代表的な象徴物だった埴輪の特徴が、現代の陶芸を作る時にも参考になると考えています。つまり、本来、器が持っていた一般的な特徴を排除することにより、別次元の作品になり得ると思います。また内側と外側が生み出すエネルギーの受容と放射という関係を通じて、例えば「死」と「生」の境界を象徴的に表現した造形としての可能性があると考えています。

―現代の埴輪づくりに挑戦したのが「マスク埴輪」ですね。

２０２１年に「マスク装飾人物埴輪」を作りました。世界が共通する大きな問題であるコロナウイルスの拡散によって人々が感じてる切望や苦しみといった、今ならではの時代像を埴輪で表現しました。素材は古墳時代の素材に近い京都で取れた赤土を使い、粘土紐を巻き上げ、表面を整えてから手や頭を貼りつける埴輪の成形技法をそのまま再現して人間形を作りました。特徴である孔は、目の部分を鋭く切り取り、また下部台座の左右に円形を孔を開けました。裸にマスクだけを付けた人間像が呆然自失したように両腕を下にぶら下げて目線は天の方を見つめています。神に恨みと願いを同時に示している人弦の複雑な感情や形を表情として表す象徴物とすることを考え、制作しました。

―埴輪を使った新しいプロジェクトが行われます。

滋賀県立陶芸の森で今年８月、「１００年後に贈りたいもの・アートプロジェクト」を行います。参加した親子４５人が粘土を作り、乾燥させてから埴輪のように野焼きして土の中に埋めるプロジェクトです。参加した一人一人が「１００年後の未来に残したいもの」を考え、創造し、タイムカプセルのように後世に残します。埴輪のように古代の人々が行っていた根源的な手法と同じです。参加者が自分自身と現代を見つめ直し、未来を考える楽しいきっかけになればと考えました。このプロジェクトを体験した人はきっと、博物館に展示してある埴輪や古代遺物を見た時の感じ方が変わるはずです。日本と韓国の過去、現在、そして未来についても考えてほしいと願っています。

（取材・構成：ジャーナリスト　菊地 正志）

河正雄コレクション

河正雄コレクションは、在日韓国人２世で実業家の河正雄が約５５年かけて収集した１万２０００余点の美術作品群。河正雄はメセナ（文化・芸術の支援）精神と「分かちあう心の美学」を実践している先駆者です。

河正雄は２０世紀に韓国と日本の不幸な歴史の中で亡くなられた犠牲者・無縁の霊を慰めるために、秋田県の田沢湖畔に「祈りの美術館」を建立しようと、在日作家の美術作品を中心にコレクションを始めました。

そのコンセプトが「祈り」です。それは平和への祈りであり、愛と慈悲にあふれた祈り、犠牲となった人々や虐げられた人々、社会的な弱者、歴史の中で名もなく受難を受けた人々に向けられた人間の痛みへの祈りの心が込められています。「二つの祖国」の中で、在日として生きた河正雄の心の在り方を表現したのが河正雄コレクションです。

田沢湖畔に「祈りの美術館」を建立する計画は日韓の歴史認識問題などで実現しませんでした。しかし河正雄はその後、収集したすべての美術作品を韓国・光州市立美術館をはじめ、霊岩郡立河正雄美術館や秋田県仙北市立角館町平福記念美術館、埼玉県立近代美術館など、韓国と日本の公的な美術館等に寄贈しています。美術を通して、韓国と日本を結ぶ懸け橋の役割を果たしている歴史的にも貴重なコレクションです。河正雄コレクションについて、美術評論家の千葉成夫は、「〈祈り〉を中心に据えた、表現としてのコレクション。世界を見渡しても、そう他には類例はない」と評しています。

この資料集に収録した河明求の作品２１点も、河正雄コレクションの一つです。

東江 河正雄（ハ・ジョンウン）　1939 年生まれ（晋陽河氏）。59 年秋田県立秋田工業高校卒。72 年株式会社かわもと（不動産賃貸業）創立。韓国光州盲人福祉協会（81 年）と同会館（89 年）設立。2001 年終身光州市立美術館名誉館長就任。03 年韓国朝鮮大学校美術学名誉博士号授受。07 年韓国朝鮮大学校デザイン大学院客員教授就任。光州広域市・釜山広域市・ソウル市名誉市民、全羅北道名誉道民、山梨県北杜市栄誉市民。韓国の文化芸術発展に寄与した功労により、2012 年に在日韓国人で初の宝冠文化勲章を受勲した。著書に『全和風－祈りの美術』『望郷－二つの祖国』『恨'95』『韓国と日本、二つの祖国を生きる』『二つの祖国』『祈りの美術』『念願の美術』『尋劔堂』など。

河正雄アーカイブ　https://www.ha-jw.com/

河明求の世界

■〈ドッケビ〉シリーズ、そして古代土器研究

アーティスト　河 明求

■河正雄コレクション（21 作）～作品と物語～

〈ドッケビ〉シリーズ、そして古代土器研究

アーティスト　河　明求

韓国出身である筆者は京都市立芸術大学院で陶磁器専攻を卒業後、2013年から現在まで埼玉県朝霞市に所在するアーティストのために設立された丸沼芸術の森に所属している。

既存の教育機関から離れ、丸沼芸術の森に所属したことによって物理的な制作だけに集中していた意識に大きな変化が起き、社会と自分の関係性について強く興味を持つようになった。カリキュラムが存在する学校とは違って現場で作家活動をしている丸沼芸術の森の作家達とのユニット活動やそれぞれの作品世界についての意見交換など、日常的な交流は作品で自分の話をするだけではなくて自分の表現を他人あるいは社会へ発信することについて認識することとなった。

2017年3月には朝霞市公式キャラクター（ぽぽたん）をデザインする機会を得た。今までの自作とは違い、特定の地域やそこに暮らしている人々を中心とした視点でキャラクターをデザインすることによって自分の表現を他人あるいは社会へ発信するプロセスについて実感する機会となった。更に自分の制作活動以外にも丸沼芸術の森を含めて多数の関係者を巻き込みながら、「日韓交流」のコーディネーターや展示を企画するなど、数多くの社会的な活動や企画を具現化している。

社会的な活動の増加とともに近来、発表している作品群は韓国と日本の持つ土地の記憶を〈ドッケビ〉シリーズというモチーフで繋げてゆくといった表現を展開している。〈ドッケビ〉は呪術的な信仰の一つであり、昔から韓国の民衆により伝来され、先祖たちの生き方や感性を共感できる象徴的な存在である。韓国の伝統説話の中でよく登場する〈ドッケビ〉たちは人間に近い形象をして超自然的な力を持つ者で、悪くて人に害を与える鬼とは違う人間のような心を持つ親しい神として描かれている。

〈ドッケビ〉は今の時代にも漫画やドラマで制作されているほど韓国ではまだ大衆的で象徴的な存在として人々の意識の中で生きている。2016～2017年に韓国で放送され、最高視聴率20.5%を記録したドラマ〈ドッケビ〉の成功は代表的な事例の一つである。

自分が制作している〈ドッケビ〉シリーズは「民族大百科事典」、「三国遺事」などの韓国歴史資料を参考にして無邪気な顔をしている者や個性の強い表情をしている者が多い。権威的で重い感じの神様の姿ではなくて変化に富む人間の感情を代弁し、見る人に親しみと共感をもたらす存在としての表現を目指している。

また、〈ドッケビ〉とともに‘時間’と‘記憶’は現在の自分の制作において、とても重要なテーマになっており、人間の物理的な生命より長く存在しているものについて興味を持つようになった。もう消えてしまった過去の人との物語や関係性をそのまま記憶している存在は、ある偉大な歴史書よりも自分に大きな感動とインスピレーションを与えてくれている。自分が興味を持っている物とは昔の宗教用品や芸術作品などの特殊な目的を持っていた物だけに拘らず、過去の人の痕跡が残っている日用品などその対象は幅が広い。

さらに人間の寿命を超えた永続的な時間の中での存在に関する自分の研究を進めていくうちに、2020年6月に韓国のソウルで開催された個展「華麗なる神のドッケビ：時間の痕跡から目覚める」では歴史のある韓国の古美術画廊「高麗房」が所蔵している先祖たちの魂を感じさせる古美術品を協賛してもらい、自分が制作した〈ドッケビ〉シリーズとコラボレーションして構

成する機会を得ることができた。

展示で紹介された数百年前のバンダジ（韓国の伝統的な家具の一つで上部だけに扉のある箪笥）、米櫃、テーブルからは先代の生活や文化を共感できる古拙の美を、自分の〈ドッケビ〉シリーズでは無形の物語や精神的な感性を感じさせることを目指して展示構成に取り組んだ。

ソウルでの個展を通して今までのように断片的で物理的な制作方向から離れ、過去の痕跡を持つ古美術、昔の物語と意識をモチーフとし、現代に復活させた自分の〈ドッケビ〉シリーズのコラボレーションによって過去と現在を繋ぐ新たな表現の可能性を感じることができた。

上記のような自作の背景より、現代陶芸に対する更なる根源的な古代史研究の必要性を実感じ、これからは日本と韓国の古代歴史や文化の研究を深めて行きたいと思った。

筆者の母国である韓国と日本は長い歴史の中で、古代から緊密な交流を行っており、コミュニティーのあり方、国境や言語の解釈、社会的ヒエラルキーにおいて現代とは違う視点を持っていたものと思われる。それらは発掘された遺物からしか想像できないのではであるが、かたちが語る言語として現代の我々に訴えてくるものがあるのだ。

共通する経験の記憶を持っている集団が多くなるとそれが歴史となる。ドイツ出身のエジプト専門学者ヤン・アスマン（Jan Assmann・1938年～）は“「文化的な記憶」はその集団のアイデンティティを構成する核心である。「文化的な記憶」が失われるとその集団の瓦解と解散を意味する。”と語っている。

しかし、現代社会の根源的な記憶でもあるべき古代文化を考察してそれを今の社会と結ぶ活動や研究はほとんど見受けられない。特に日本と韓国において同じ焼物でありながらも、古代土器から現代の陶芸表現へ応用する事例が少ないことを否定することは難しい。

韓国で生まれ、日本で陶による造形表現について研究をしている筆者はこのような内的、外的な問題意識に共感し、古代日韓交流の根源とも言われる古墳時代に日本と韓国で製作された古代土器が持っている意義と造形的な特徴について分析を行うことによって現代日韓における新たな陶芸表現の可能性と古代が持っているアイデンティティの有り様を模索していきたい。

そこで筆者は古墳時代に製作された土器について分析を行うことで、陶による新たな造形表現に対する考察ができるのではないかという仮定のもと、本研究を進めている。

特に古墳時代には日本列島と朝鮮半島の交流関係が非常に密接であり、特に5世紀頃日本列島に渡って行った渡来人による轆轤や窖窯などの最新技術の輸入は土師器の製作変化や須恵器の拡散という変化を起こし、当時の社会や人々の日常生活にも大きな影響を与えていた 。

さらに前方後円墳という日本特有の古墳様式が全国的で築造される状況とともに、その文化が当時の朝鮮半島の南西部地域にも大きな影響を与えていたことが分かった。特に注目したいのは規模と種類が拡大した埴輪が当時の日本列島が共通していた集団的文化を代表する象徴的存在であったことである。

筆者が研究した「埴輪」の特徴を歴史資料としての意義性と造形的な特徴に分けて【表1】に整理した。

歴史資料的価値	＊前方後円墳という日本特有の古墳様式が全国的で築造される状況とともに、規模と種類が拡大した埴輪は古墳時代の日本列島が共通していた集団的文化を代表する象徴的存在である。 ＊ 当時の熟練の工人の手による優れた作品でありながら、時代象を形として知らせてくれる歴史資料として高く評価されている。考古学的資料として評価されている。
造形的特徴	＊当初、実用性をために製作された土師器や須恵器の製作より起因したやきものの製作プロセスと深く関係し、空洞で垂直構造の形をしている。 ＊垂直的な造形性は地面（人間）から天（神）へ向かう造形的イメージを内在していることを象徴している。 ＊人物の目と口には鋭い孔が開けられ、下の円筒形台部分の右と左側には同じ大きさの円形孔が対称になって開けられている。孔による内側と外側の関係性を物理的、精神的にかかわらず何らかのエネルギーを外部から「受容」し、内部の空間を介して再び外部に「放射」する。

【表1】≪埴輪武装男子立像≫の歴史資料としての意義性と造形的な特徴

そこで「埴輪」が歴史資料として評価している「時代性を形態として伝えている」、造形的な特徴である「垂直的な造形性、開けられた孔による内側と外側の関係が生み出す象徴性がある」といった二つのポイントに焦点を絞り、実験制作を行っている。

【図1】河明求　≪マスク装飾人物形埴輪≫　2021年　丸沼芸術の森所蔵

例えば、2021年制作した筆者の作品≪マスク装飾人物形埴輪≫（【図1】）は現在、世界が共

通する大きな問題であるコロナウイルスの拡散によって人々が感じている切望と苦しみといった今ならではの時代像を形として表現した。

素材は京都で取れた赤土を使い、粘土紐を巻き上げ、器面調整を行って突帯を貼りつける埴輪の成形技法をそのまま再現して人間形を制作した。

埴輪の特徴である孔については≪埴輪武装男子立像≫と同様に人間像の目の部分だけ鋭く切り取り、下部の円筒形台の左側、右側に同じ大きさの円形の孔を開けることで見る側が内部空間の存在を認識し、内部と外部との関係性による一つの造形として表現した。

現代社会における人間そのものを表現するため裸の像とし、その代わりに防疫対策の一環として世界中の人々が日常生活で着用することとなったマスクを人間像の顔に付けることによってコロナウイルスによる時代性を表した。

作品の中の人間像は茫然自失としたように両腕を下にぶら下げて目線は天の方を見つめている。神に恨みと願いを同時に示している人間の複雑な感情を形や表情として表す象徴物とすることを本作品の制作に取り組んだ。

≪マスク装飾人物形埴輪≫は2021年10月04日から10月10日に埼玉県朝霞市に所在している丸沼芸術の森の展示室で開催された筆者の個展「古代からの手紙」に出品し、100人以上の観覧者が来館した。展示期間中、現場で50人を対象に口頭で行われたアンケート調査では応答者の9割以上の人が「本作品をみて今の人々の姿や感情を代弁してくれるようだ」と感想が得られ、実験制作として目指していた可能性について成果はあったと自己評価している。

今回の実験制作において検証結果を基に来年度は単一の作品表現だけでなく一般の人々がそれぞれの記憶や思いを形にした埴輪を制作し、それらを構成することによって「現代の集団的記憶が内在している空間を構成する」というコンセプトのプロジェクト形式の作品を計画している。

近代以降、グローバル化が急進し文明と民俗のアイデンティティが重要な主題として浮上してきた。現代の日本と韓国は古代からの偉大な歴史と遺物を持っているのにもかかわらず、日本の敗戦と韓国における植民地支配や韓国戦争などの近現代の時代背景と国際情勢によって主体的に現代を迎えることが出来ていない。同時に周辺国との理解関係に振り回されて国として自主化を実現することは難しい状況である。

筆者の研究を通して古墳時代のように朝鮮半島から最新技術を積極的に受け入れながらも日本列島特有のオリジナリティを生み出したという社会状況を写し鏡として、これからの陶芸としての表現を再考するきっかけとなればと考えている。

私が大好きな食べ物は悪い権力者です

210mm×160mm×310mm　陶、白金、漆、スワロフスキー　2017年作

【物語】

韓国には地域によって様々な物語と形式を持っている伝統的な仮面舞踏が存在している。

作品『私が大好きな食べ物は悪い権力者です』は悪い貴族や権力者にいたずらをし、最終的には食べてしまうキャラクターである「ヨンノ仮面（영노탈）」をモチーフにして制作した。

伝統的な仮面は顔の形しか存在しないが、自分が想像して体の部分も制作した。体の足と手には鋭い爪を付いており、がっちりしたバランスをしている。この世の中には悪い権力者が多いためお腹はすでにいっぱいになっているが、もっと食べなければならない者がたくさん残っている。

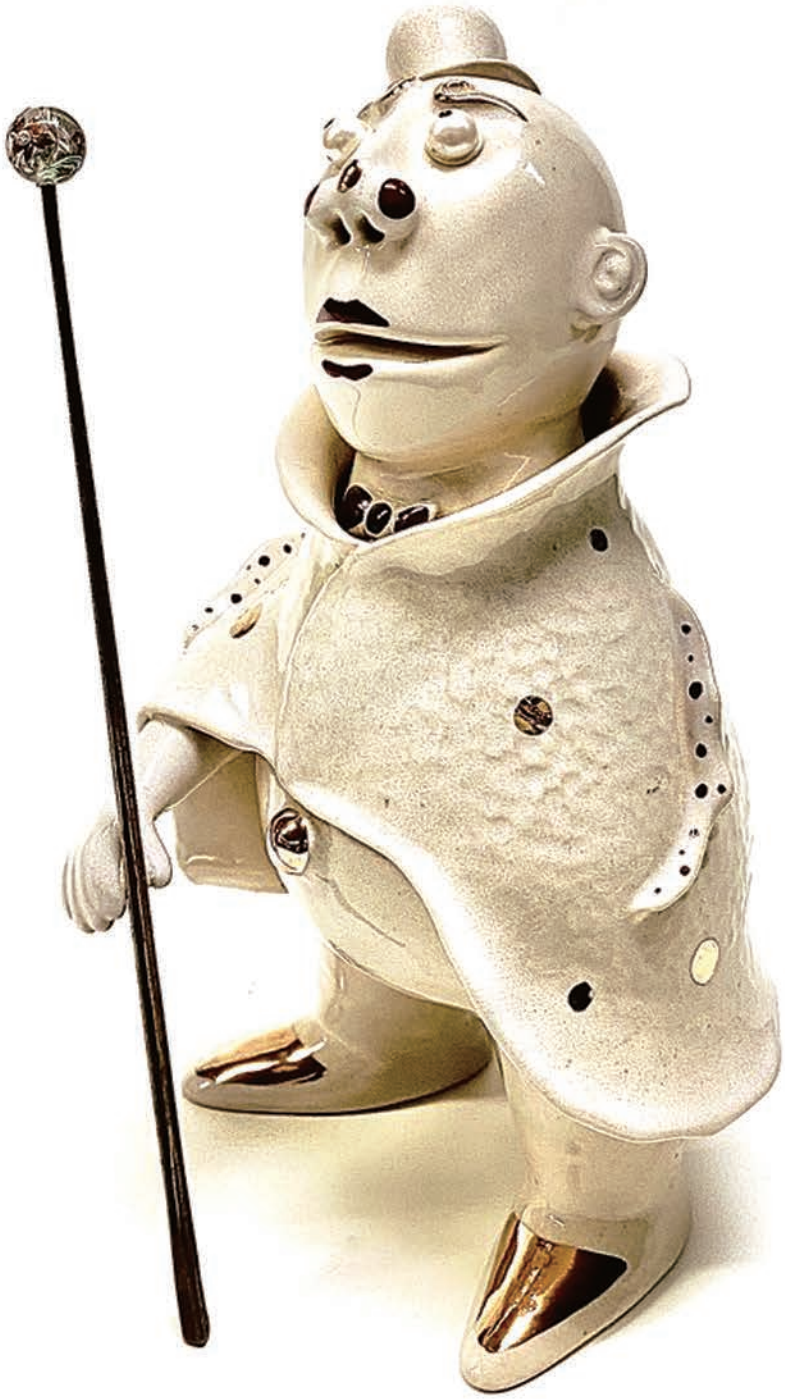
幸せの呪文

200mm×150mm×410mm　陶、金、白金、漆、スワロフスキー　2019年作

【物語】

昔から「豚」はアジア地域で‘幸運’、‘福’、‘金運’などを象徴する縁起物として存在してきた。

作品『幸せの呪文』は2019年を迎え、当年度の干支であった「豚・猪」のイメージと神秘的超能力を持っている魔法使いのイメージを融合し、皆様の幸福な１年への願いを込めて制作した。



白いウィザード

130mm×120mm×230mm　陶、金、白金、銅、漆　2021年作

【物語】

「ドッケビ」は呪術的な信仰の一つであり、昔から韓国の民衆により伝来され、先祖たちの生き方や感性を共感できる象徴的な存在である。韓国の伝統説話の中でよく登場する「ドッケビ」たちは人間に近い形象をして超自然的な力を持つ者で、悪くて人に害を与える鬼とは違う人間のような心を持つ親しい神として描かれている。

作品『白いウィザード』は自分が考える「ドッケビ」のイメージと神秘的超能力を持っている魔法使いのイメージを融合し、皆様の幸福を祈りながら制作した。

幸運の種

140㎜×140㎜×270㎜ 陶、金、白金、漆、スワロフスキー、木 2021年作

【物語】

「ドッケビ」は呪術的な信仰の一つであり、昔から韓国の民衆により伝来され、先祖たちの生き方や感性を共感できる象徴的な存在である。韓国の伝統説話の中でよく登場する「ドッケビ」たちは人間に近い形象をして超自然的な力を持つ者で、悪くて人に害を与える鬼とは違う人間のような心を持つ親しい神として描かれている。

作品『幸運の種』は自分が考える「ドッケビ」のイメージと神秘的超能力を持っている魔法使いのイメージを融合して制作した。作品の中で「ドッケビ」が手のひらの上に持っている丸玉は幸運を招いてくれる種を意味している。

回帰

本体　190㎜×160㎜×230㎜　　花　120㎜×80㎜×130㎜

陶、金、白金、漆、スワロフスキー　2022年作

【物語】

韓国の口伝説話に登場する「不可殺伊」は代表的な二つの超能力がある。先ず、人間の悪夢を食べてくれること、次は鉄を全部食べてしまい、どんどん巨大になっていくことである。

自分は「鉄」を人間が作り出した産業であると認識し、もしかして「不可殺伊」が今の時代に現れると全てを本来の自然に取り戻してくれるのではないだろうかという想像から作品『回帰』を制作した。

守り神

200mm×150mm×250mm　陶、金、白金、漆　2021年作

【物語】

アジアの神話、伝説などによく登場する様々な不思議な存在の形態的な特徴を融合して自分のオリジナル・ドッケビを制作した。

『守り神』は麒麟の角、ヘチの顔、不可殺伊の手、龍の足などなど、様々な存在の形を考察し、まるで立体コラージュのような感覚で組み立てながら全体図を完成した作品である。

誰かのための新大陸

200㎜×250㎜×200㎜　陶、金、白金、漆　2021年作

【物語】

ある日、亀は新大陸を見つけるための旅に出た。巨大な海の中で泳いでも、泳いでも大陸は現れなかった。絶望した亀はこのように心を入れ替えた。“自分の夢にはたどり着くことができなかったが、また誰かが新大陸の夢を見て旅に出る時のために自分が新大陸になってあげたい。”

その瞬間、奇跡が起きた。亀の背中から植物が入りはじめ、体も大きくなってきたのだ。亀はとっても幸せになり、夢を持って挑戦する者を待っている。

幸せなクジラ

160mm×280mm×150mm　陶、金、白金、漆　2021年作

【物語】

クジラは自分にとって特別な意味を持っている。お母さんが自分を妊娠中にみた夢の中で大きなクジラと会ったと言われたことがある。

さらに哺乳類であるクジラが水中で生きていられる理由として様々な説がある中で、海が大好きだったクジラが必死に身体を改造し、結局は海で住めるようになったという童話のような説が一番好きだった。

それはある基準も確信もない海という漠然とした世界で生き残るために耐えてきたクジラの人生を想像してみるとアーティストとして生きている自分と重なってみえたからだろう。

きっとクジラも自分も夢があるからこそ幸せになれると信じている。

幸せな亀

200㎜×300㎜×200㎜　陶、金、白金、漆、スワロフスキー　2021年作

【物語】

アジア地域で亀は誠実で責任感が強いイメージを持っている。特に日韓ではウサギと亀の話や、亀を放生すると後に恩を返してくれると信じる風習などが共通している。

作品『幸せな亀』は誠実な表情で堂々に立っている亀の形に神様のような華やかな装飾を加え、亀の真面目な感じを活かしながらも愛嬌もあるイメージを目指して制作した。

恐怖を乗り越えて気付いたこと

220㎜×200㎜×210㎜　陶、金、白金、漆　2021年作

【物語】

巨口鬼は朝鮮初期、領議政まで務めた申叔舟（シン・スクチュ）と生涯を共にしたと言われる。巨口鬼は、名前の通り口が大きいだが、どの位の大きさかというと、上の唇は天に触れ、下の唇は地に触れたそうだ。

申叔舟が官吏を選ぶ科挙を受けるために、学友たちと一緒に歩いている途中、道の真ん中に口を大きく開けた巨口鬼にぶつかってしまった。驚いた友達は、みんな逃げたが、申叔舟は堂々たる姿で、巨口鬼の口の中に歩いて入った。すると、大きな口がなくなり、青衣童子（チョンイドンジャ、青い服を来た男の子の妖精）が現れて、お辞儀をしながら一生申叔舟に協力していたと言われている。

作品『恐怖を乗り越えて気付いたこと』は巨口鬼（恐怖）を克服したことによって青衣童子（悟り）を得た申叔舟の物語をモチーフにして制作した。

Mask series (BiBi-Mask)

230mm×100mm×320mm　陶、金、白金、漆　2021年作

【物語】

韓国には地域によって様々な物語と形式を持っている伝統的な仮面舞踏が存在している。

作品『Mask series (BiBi-Mask)』は悪い貴族や権力者にいたずらをし、最終的には食べてしまうキャラクターである「ビビ仮面（비비탈）」をモチーフにして制作した。

伝統的な仮面の形をそのまま応用し、色彩や装飾は自分のオリジナルを高めて表現してみた。「ビビ仮面（비비탈）」を壁に飾ることによって皆様を悪人より守ってくれるだろうと信じている。

Mask series（方相氏）

320mm×120mm×380mm　陶、金、白金、漆　2021年作

【物語】

アジアには地域によって様々な物語と形式を持っている伝統的な仮面舞踏が存在している。

方相氏とは、大晦日や節分に行われる追儺（ついな）式、即ち鬼やらいの時に魔や鬼を払う為に出てくる神様で、或いはその神様に扮装する役目の人々の呼称である。また、天皇・親王・太政大臣の葬送の際には棺を載せた車の先導をも務めた。

作品『Mask series（方相氏）』は伝統的な方相氏仮面の形をそのまま応用し、色彩や装飾は自分のオリジナルを高めて表現してみた。「方相氏仮面」を壁に飾ることによって皆様を悪い魔や鬼より守ってくれるだろうと信じている。

Mask series（白虎）

180mm×100mm×170mm　陶、金、白金、漆　2022年作

【物語】

韓国では、虎は昔から百獣の王として君臨し、その勇ましさから人々にとっては威厳や勇敢の象徴として神聖視されていた。

韓国では、信仰・文学・芸術など多岐にわたって虎と接する機会が多く、韓民族と最も密接な関係にある動物として大事にされてきた。

作品『Mask series (白虎)』は2022年を迎え、当年度の干支であった「虎」のイメージをモチーフにし、壁に飾れるようにマスクの形で制作してみた。

Mask series（青虎）

200mm×100mm×150mm　陶、金、白金、漆　2022年作

【物語】

韓国では、虎は昔から百獣の王として君臨し、その勇ましさから人々にとっては威厳や勇敢の象徴として神聖視されていた。

韓国では、信仰・文学・芸術など多岐にわたって虎と接する機会が多く、韓民族と最も密接な関係にある動物として大事にされてきた。

作品『Mask series (青虎)』は2022年を迎え、当年度の干支であった「虎」のイメージをモチーフにし、壁に飾れるようにマスクの形で制作してみた。

Happy Tiger (Blue)

350mm×200mm×270mm　陶、金、白金、漆　2022年作

【物語】

韓国では、虎は昔から百獣の王として君臨し、その勇ましさから人々にとっては威厳や勇敢の象徴として神聖視されていた。

韓国では、信仰・文学・芸術など多岐にわたって虎と接する機会が多く、韓民族と最も密接な関係にある動物として大事にされてきた。

作品『Happy Tiger (Blue)』は2022年を迎え、当年度の干支であった「虎」のイメージをモチーフにし、韓国の伝統的な民画に登場する虎の表情や形を参考にしながら制作してみた。

マスク装飾人物形埴輪

150mm×150mm×390mm　陶　2021年作

【物語】

『マスク装飾人物形埴輪』は現在、世界が共通する大きな問題であるコロナウイルスの拡散によって人々が感じている切望と苦しみといった今ならではの時代像を形として表現した。

素材は京都で取れた赤土を使い、粘土紐を巻き上げ、器面調整を行って突帯を貼りつける埴輪の成形技法をそのまま再現して人間形を制作した。

現代社会における人間そのものを表現するため裸の像とし、その代わりに防疫対策の一環として世界中の人々が日常生活で着用することとなったマスクを人間像の顔に付けることによってコロナウイルスによる時代性を表した。

現代のメッセンジャー

280mm×120mm×240mm　陶　2021年作

【物語】

古代の日韓で「鳥」は神様と人間の間を繋いでくれる架け橋として認識していた。今の時代でも神社に立っている鳥居などがその代表的例であると言われる。

作品『現代のメッセンジャー』は古代とは違って今の時代のコミュニケーションの手段として主に使われているインターネットシステムをモチーフにし、古代日本と韓国で制作された鳥形の土器のイメージと融合したイメージを構想した。

全体的なイメージは古代土器風で制作しており、背中には「Wifi」のシンボルを付け、作品の下部にはハッシュタグを付けたテキストメッセージで装飾した。

ここが私の家です

250mm×250mm×280mm　陶、漆　2021年作

【物語】

韓国で虎は昔から百獣の王として君臨し、その勇ましさから人々にとっては威厳や勇敢の象徴として神聖視されていた。

しかし、今の時代の韓国の虎は動物園で生まれて一生、動物園で生きていく。

形は昔と全く変わっていないのにその意義性と現状は差が大きい。今の時代の虎も事実のまま残したいという気持ちとともに本来の虎の在り方を同時代の皆様と考えてみなければという願いを込めて制作した。

土偶付き特殊器台

170㎜×150㎜×310㎜　陶　2021年作

【物語】

土偶とは広義に土製の人形をいう。古墳時代の埴輪も、かつて埴輪土偶とよばれていた。日本では縄文時代の人形の土製品をさす場合が多い。

韓国にも土偶による表現は多く、特に国宝（第195号）『土偶装飾長頸壺』は首が長い壷に男女が性交をしている形態や妊婦が弦楽器を演奏する姿の土偶を付け、作品を見る人がその時代背景と価値観を推測できる。

作品『土偶付き特殊器台』は古代日韓の祭祀の時に使用したと言われている特殊器台の形態を制作し、上部には携帯をいじっている今ならではの人の姿をした土偶で装飾した。作品をよく見ると携帯の代わりに杖を持っている年寄りの人が寂しい表情で目線は下を向いている。

土偶付き長頸壺

200㎜×200㎜×270㎜　陶　2021年作

【物語】

土偶とは広義に土製の人形をいう。古墳時代の埴輪も、かつて埴輪土偶とよばれていた。日本では縄文時代の人形の土製品をさす場合が多い。

韓国にも土偶による表現は多く、特に国宝（第195号）『土偶装飾長頸壺』は首が長い壷に男女が性交をしている形態や妊婦が弦楽器を演奏する姿の土偶を付け、作品を見る人がその時代背景と価値観を推測できる。

作品『土偶付き長頸壺』は『土偶装飾長頸壺』を参考にして先ず、首が長い壷の形態を制作し、世界が共通する大きな問題であるコロナウイルスの防疫対策の一環として日常生活で着用することとなったマスクをして必死に壁を登っている人形の土偶と平和な日常を過ごしている猫の形の土偶を対比させて装飾した。

ドラえもん形埴輪

130㎜×130㎜×290㎜　陶　2021年作

【物語】

形象埴輪は、古墳時代に古墳の墳丘上や周囲に立て並べられた焼き物である埴輪のうち、家や器物・人物・動物などを象った具象的なものをいう。

その中でも動物埴輪は当時、人間と深い関わりがあった馬・犬・鵜・鷹・猪・鹿・水鳥・鶏・牛などが確認されている。

そこで自分は今の時代を象徴して人間と深い関わりのある存在について考察し、キャラクター埴輪を制作するようになった。

『ドラえもん形埴輪』は日本だけではなく、世界中に人気がある「ドラえもん」をモチーフにして制作した。

評論

■アーティスト・河明求について
東京造形大学美術学科教授　大橋 博

■「古代からの手紙」に寄せて
東京造形大学美術学科教授　大橋 博

■C'est quoi ça?
美術評論家　金 主鈺（キム・ジュオク）

■トッケビ達の集い－河明求の作品
美術評論家　千葉成夫

アーティスト・河明求について

東京造形大学美術学科教授・彫刻家 大橋 博

韓国人アーティスト河明求に会ったのは５年前であった。ロンドンのロイヤルカレッジでの留学を終え、新たな制作場所を求めて現在の活動拠点である「丸沼芸術の森」へやってきたのだ。しっかりした日本語で自分の持つアーティスト像を語る河の様子は、最近の日本の若者にはなかなか見られないせいかとても新鮮に感じられた。ちなみに「丸沼芸術の森」とは東京の郊外にある絵画、彫刻、工芸などの美術作品制作に関わる作家達の共同アトリエであり、現在１０名が在籍している。

河が丸沼を知ったのはロンドンでの偶然の出会いからのようで、以前から日本の民芸運動に関心を持ち、特に河井寛次郎や富本憲吉の制作態度には深く共感を寄せているようであった。

私とは最初から気が合い、お互いのアトリエでよく食事を取りながらいろいろな話をした。その中で特に印象的だったのは彼の実直な人柄と変化を求める制作態度だった。パブロピカソの言葉に「他人を模写するのは必要なことである。しかし自分を模写するのは哀れなものだ。」というものがある。河の意識は常に他人、あるいは社会から得られるエネルギーに注意が向けられているように思う。

例えばロンドン時代から制作されたポケットスクエアのシリーズだが、外国人から見たイギリス社会の歪みと憧れを混在させ、機能を排した器をつくっている。ボロ雑巾のような表情を持った陶製の紳士の象徴は美術品として壁にかけられて展示されたのだった。日本にきてからは韓国と日本の持つ土地の記憶を「ドッケビ」というモチーフで繋げてゆくといったことを展開している。妖怪はそれぞれが人間臭いストーリーを持っており、彼の台本に従いその形態が決定された作品からは、どこかユーモラスで情けない人間への視点を感じる。

現在、「丸沼芸術の森」では河を中心としながら韓国との文化交流事業としてアーチストインレジデンスを行っており、年間３～４名作家を招聘している。さらに数回の交流展を行いながら他のアーティスト達とも親睦を深めている。このように河の活動は作品制作のみならず人間関係の構築にも及んできている。また現在も秘密の計画が進行中らしい。

パブロピカソはこうも言っている「冒険こそが、私の存在理由である」と。

（2018年6月）

「古代からの手紙」に寄せて

東京造形大学美術学科教授・彫刻家 大橋 博

河明求は、韓国の大学で陶磁器を専攻し作品制作を通じ韓国における近、現代の陶芸文化の変化について様々な疑問を感じるようになった。特にアジアにおける現代陶芸の礎となる「走泥社」の活動に深く感銘を受け、日本への留学を決意する。

京都市立芸術大学大学院へ入学後、京都陶芸の歴史や人物を調査し、器の制作を行うが、修士2 年時には同市より奨学金を受け、イギリスのRoyal College of Art へ交換留学の機会を得ることができた。

イギリスでは日本の近、現代陶芸と密接な関係を持つバーナード・リーチとルーシーリーの研究を行うことにより自作の幅を拡げる機会を得ただけでなく、現代美術と陶芸の関係や国際的な工芸家の活動にも興味を持つようになった。大学院を修了後にとあるきっかけがもとで埼玉県朝霞市のレジデンス施設、丸沼芸術の森に所属することになる。

現在は韓国と日本の持つ土地の記憶をドッケビ（日本での鬼のような存在）というモチーフにより作品制作を展開している。また、作家と社会をつなぐ活動として日韓の国際交流展やアーティストインレジデンスプログラムを実現するなど、両国の交流のために様々な活動を行っている。

以上のような活動を行う中、2021年度より東京造形大学大学院博士課程において作家としての思考を深く掘り下げるため、「古代土器の特徴と自作について」の研究を行うことになった。

主に日本海を通じてダイナミックな交流が行われたであろう3〜７世紀に焦点をあて、現在の河自身の活動と照らし合わせながらの研究テーマである。「両国における人流によりつくり出された様々な美術品にはどこか懐かしい人々の営みが見て取れるばかりでなく、現代へと繋がる大切なメッセージが込められている」と考える。そして、これは彼の作品制作における原点回帰というだけではなく、韓国と日本をつなぐテーマでもある。

2021 年10月4日から10月10日まで埼玉県朝霞市に所在している丸沼芸術の森で開催された「古代からの手紙」という河の個展DM イメージにもなっているマスクをつけた埴輪の人物は古代に思いを馳せる彼の姿なのか、あるいは現代を俯瞰する古代人なのか。いずれにせよそこに佇む人形（ひとがた）の焼き物は時空をすかした語り部として私たちの記憶にアプローチする。そして今日もまた我々の営みは未来へ向けた手紙となってポストへ投函された。

（2021年9月）

C’est quoi ça?

美術評論家　金 主鈺（キム・ジュオク）

90年ぐらい前にルネ・マグリット（René Magritte、1898年11月21日 -1967年8月15日）は「C eci n’est pas une pipe」と語っていたが、現在の我々は河明求の作品に向かって「これは何ものですか？」という質問をかけている。実はその答えが大切ではないのにもかかわらず。

プルンジデ創作セムト(푸른지대 창작샘터・韓国の水原市が運営するアーティストインレジデンス)批評家マッチング・プログラムを通して河明求と会った。

その時は韓国ソウルの昌德宮の近所にあるギャラリー・LIMにて河の個展が開催されていた。

『秘密の集まり』という展示タイトルを見てふっと笑ってしまった。

河と会う前に彼の作品をリサーチしてみたが、正直に中々ピンとこなかった。それは可愛らしい河の陶造作品を見ていると、いつも通りの現代美術に対する思考ができなくなったからである。事前に様々な質問も用意して会場に訪れたが、実際に河を会って聞いた質問の半分以上が「それでこれは何ものですか？」だった。

ドッケビ、ヘテ、サイ、虎などと似ている作品の形や正体も気になっていたが、まるで初対面の人に名前を聞く癖が河の作品についても適用されたと考える。

陶芸を専攻した河の初期作品群は偶然性と抽象性を混在し、形とマチエールが強調された陶による造形作品だったが、2016年からは「ドッケビ」[i]をモチーフにした作品群を発表している。

最初は一つの独立したオブジェとして表現をし、河はそれを「工芸的単品」と語っている。2

017年からは他の作家とのコラボレーション制作を経験し、表現の方法と作品構成について変化

するきっかけとなった。その時から空間を使う表現や人々の関係性を活かした作品群を紹介している。

今回の個展『秘密の集まり』では様々な伝説の動物をモチーフとしたドッケビ達を花瓶、コップなどと一緒に構成し、複数のグループで配置していた。壁を見つめている者、円形に囲んでお茶を楽しんでいるような者など、実際に秘密らしい集まりの風景が見えてきた。

河は神話、伝説、民談などの口伝説話をベースにした作品が多い。特にアジア地域で共有している物語や『韓国民俗文化大百科事典』に記載されている内容を参考にしている。様々な物語の中には虚構的な主人公がよく登場しており、動物や人の形象をした河のドッ

ケビシリーズにもそのような虚構的な存在がほとんどである。

物語の中の登場人物が虚構的であるからこそ、社会の赤裸々な風景と意味性を直接的に表すことができるだろう。河は昔話に登場する不思議な存在に興味を持ちながら、過去の品物が持つ用途性からもインスピレーションを受け、時間が流れて行っても変わらない「人と人の物語」に注目している。

さらに河は主人公だけではなく普段は注目されてない周辺人物まで観察している。例えば『檀君神話（韓国の開国神話）』に登場する主人公の熊よりも虎の方を不憫に思う。洞窟の中でヨモギとニンニクのみを食べながら100日間、我慢すると人間になれるはずだったが、熊と違って虎は洞窟から逃げ出してしまう。結局、虎は人間になることはできなかったが、このような虎の失敗話がむしろ最近のコロナ禍による人々の落ち込んでいる心に開放感を与えてくれるかもしれない。その後、虎は河の作品世界の中で「仁王山の虎」として復活する。

また河が幼い頃から好きだった『こぶじいさん』の物語でドッケビが善良な人のこぶを取ってくれる場面を作品「Sometimes a miracle happened 2」で表現した。この作品には「目の前の利益を求めることではなく、誠実に生きていく人々の心の中に希望といったドッケビが現れるだろう」と信じている作家の意識が投影されている。

このような河の制作傾向は単純な勧善懲悪の話だけではなくてその時代性を共有する、つまりミシェル・フーコー（Michel Foucault、1926年10月15日 - 1984年6月25日）が言ったエピステーメーの断面を示している。例えば『春香傳』、『沈清傳』のような韓国の古典小説の中には今の時代で通用しない価値観も描かれている。

しかし河は時代が変わっても道具が変化するだけで、人間の生き方は大きく変わることはないないと信じている。特にコミュニケーションのあり方が変わっても人間の「生」と「死」といった自然な循環構造は絶対的に変わらない。

河の作品を観た多数の人は筆者と同様に「これは何ものですか？」と質問する。さらにドッケビの中に内在している物語に興味を持つようになる。厳密に考えると作品の形態がどのような動物に影響されたのか、どのような内容を参考にしていたかは重要な問題ではない。それは河の作品は人と人のコミュニケーションの媒体になることを目的としているからである。

まるで家に子供が生まれるとその子供を話題にして対話が広がることと同じような感じであろう。このようなコミュニケーションではそれぞれが共通する対象について認識、解釈したコメントが対話のほとんどになり、これは人と人との間で行われる一つの疎通のあり方である。

それではこのようなコミュニケーション方法を作品に用いている河が考えている芸術的表現とは何なのか？

初頭でも言及したように筆者が河の可愛らしいドッケビ作品と遭遇した時、まずは繊細な表現が印象的だった。例えば作品の足首の部分に記載していた河のサインがタトゥーをした人のように見えてくるなど、気になる細かい部分について「これはなんですか？」という質問を繰り返した。

作品に対する視覚的認識と河の説明がぴったり一致しない場面も認識しながらも、また河の表現意図と説明がもっと聞きたくなる。しかし芸術というものは主観的行為の結果として現れるため河が想像した全てを理解することは不可能である。逆に河の頭の中のイメ

ージを全て理解してしまうと彼の作品に対する興味が無くなるかもしれない。

上記の内容を基に現代美術的視点からみた河の作品表現の特徴を下記のように整理してみた。

①ドッケビ作品のビジュアルとストーリーで人の興味を引き起こす。

②SNSにアップデートしたり作品を展示販売したりして他人に露出する。

③様々な人に作品に対する好奇心を拡散させる。

つまり、河は「口伝説話」が持っている文法的特徴を造形表現として活用している。人々のコミュニケーションによって自身の作品世界が拡散し、作品を中心にそれぞれの意見交換ができるきっかけを提供している。これこそが現代美術でいう「関係性」ではないだろうか。

今まで河の作品が独特な表現プロセスを活用していることを確認したが、河の作品で最も大事なのは「現在感」を感じることである。筆者はそれぞれ個性豊かな表情のドッケビ作品から動物のイメージを連想したり、空間構成に隠されている物語を想像したりしながら作品を感想した。美学的な視点ではなく、今の瞬間に集中して楽しむ経験は久しぶりだった。

ギャラリーで河のドッケビ作品に夢中になってしまった筆者は気を取り直してもう一度聞いてしまった「それでこれは何ものですか？」勿論、その答えは大切ではない。河が見せたい作品世界では質問が生まれる状況とそこに作品、観客が共に存在することが一番重要であるからだ。

芸術のあり方を疎通機能としての視点からみると、作品は一つの媒体として解釈できる。河の作品は物としての結果物だけではなく新たな造形表現の可能性を持っている「種」になれると思う。

（2020年6月）

---

[i] 「ドッケビ」は呪術的な信仰の一つであり、昔から韓国の民衆により伝来され、先祖たちの生き方や感性を共感できる象徴的な存在である。韓国の伝統説話の中でよく登場する〈ドッケビ〉たちは人間に近い形象をして超自然的な力を持つ者で、悪くて人に害を与える鬼とは違う人間のような心を持つ親しい神として描かれている。

トッケビ達の集いー河明求の作品

美術評論家　千葉 成夫

1

河正雄さんの紹介で、僕には未知の美術家だった河明求の作品を初めて見たのは、2021 年の秋ロ、「丸沼芸術の森」でだった。日本の隣の韓国に生れ、陶芸を学び、イギリス留学の経験もあり、今は主に日本に住んで活動しているという。

河明求が作品の「モチーフ」にしているのは、一般名称でいうと「妖怪」ということになるのだろうが、そこには、日本の妖怪の「怖さ」めいたものが少しも無い。これはかなり驚きだ！　一貫しているのはユーモアや優しさであり、彼の表現者としての特質はそういうところに現れていると言っていいだろう。僕ら観客は、彼の作品を前にすると、眼と心が和やかになるのを感ずる。彼は、韓国の普通の人々の感覚や心根の本質にそういうものを見ているということである。

例えば「仮面」。日本の仮面はほとんど怖いものばかりで、とくに「能」の仮面は、美女の面ですら怖いものが多い。さすがに大衆芸能には「ひょっとこ」（男面）や「おかめ」（女面）があるが、怖くないにはそれくらいなものだろう。

だから、河明求が表現しているものは、「妖怪」というよりは、韓国語の「トッケビ」という語で総称したほうがいいような気がする。モチーフという意味では他に動物（豚、亀、虎、鳥など）、仮面、「不可殺伊（プルガサリ）」、「巨口鬼」と多様だが、それらも纏めて「トッケビ」と言えばいい。

ユーモラスで優しい彼の「トッケビ」達の特徴のもう一つは、みんな「庶民の味方」である点だ。世界中どこでも、どんな時代でも、生きてゆくなかで一番の辛酸をなめてきたのは普通の庶民達である。彼らの辛酸の主原因は、一般論としていえばもちろん権力と富は「特権層」に集中してしまって、その皺寄せが庶民に行くからである。河明求は庶民の立場と目線で作品を作っている。「トッケビ」は、悪い権力者や貴族にいたずらを仕掛け、やっつけてくれる存在の象徴なのである。例えば《私が大好きな食べ物は悪い権力者です》という、「ヨンノ仮面」を元にした作品のようにだ。

2

動物達をモチーフにした作品も多い。豚、亀、鳥、虎などである。それらの作品に見られるのは「擬人化」ということなのだが、彼の場合は「擬人化」と言うだけでは物足りなく、動物達を人間に準ずる地平で捉えて表現しているように見える。動物達はいわば「〈人間´〉」（人間ダッシュ）の存在になっているのである。例えば「勇気や威厳」のシンボルとして韓国で神聖視されてきた百獣の王である虎でさえ、彼の手にかかると、にこやかな《Mask series　（青虎）》や、ちょっと自信無げな《Mask series　（白虎）》や、お茶目でキュートな《Mask series　（青虎）》として表現される。

ちなみに、日本列島には虎とかライオンといった類の動物は（少なくとも洪積世後期までは）存在しなかったので、人間との関わり合いは生じなかった。日本の民話にも「動物の擬人化」は

あるけれど、そのほとんどは「鶴の恩返し」のようないわゆる「動物報恩譚」である。つまり動物が人に恩を返すという話であり、しかも鶴は最後は人から離れていくというように、話は寂しさで締め括られることが多いようだ。韓国の虎、豚、亀、鳥などとはずいぶん異なっている。妖怪譚・民話・昔話・神話をめぐって、僕の眼が韓国と日本の違いの方に傾きがちなのは、つい比較してしまうからである。

それはともかく、僕は、河明求という美術家の、おそらく類まれな資質に注目している。どんなモチーフをも自身の柔らかい、穏やかな感性のなかに溶け込ませて、特異な表現として実現する才能がそこにある。

例えば「コロナ」の「マスク」(《マスク装飾人物埴輪》) とか「Wifi」のシンボルと「ハッシュタグ」を付けた鳥 (《現代のメッセンジャー》)、さらには《ドラえもん形埴輪》などを見れば、彼のその才能は現代と未来の出来事やテクノロジーに対しても、また日本の社会状況についても、充分に発揮されていることが判る。

「色彩」の使い方にも彼の資質は明瞭に現れている。使っている色数は多くは無く、大きく分類するなら青・黄色味がかった白・陶土そのものの色、このほぼ三種類が基礎的なものである。それを、モチーフによって使い分けている。そのセンスがいい。

3

ところで、会場で見た《土偶付き長頸壺》と《土偶付き特殊器台》の印象が、僕のなかで何故か後を引いた。その印象はそのまま消えようとしていたのだが、のちに送られてきた作家の資料を見て、この「前者」は韓国の国宝第 195 号《土偶装飾長頸壺》に想を得ていると知った。それで思い出した、僕はこの作品を以前に図版で見たことがあった！　ネットで確かめてみると国立慶州博物館所蔵だった (註 1)。

それはそれとして、僕は考古学は素人なのだが (美術史はやったが)、古代朝鮮の考古学ではそれは「異形土器」のなかの「装飾土器」に分類されている。この国宝第 195 号作品に表現されているのは琴を弾く妊婦、四つん這いの女性とその後ろに性器を露出させている男性 (性行為で豊穣を示す)、蛙を追う蛇 (辟邪の意味を持つ)、亀、鳥、などだそうである。

他方、河明求の作品《土偶付き長頸壺》にはマスクをして必死に壁を攀じ登っている人の土偶と、平和にゆったり構えている猫の土偶が表現されている。また《土偶付き特殊器台》の方は携帯を見ている二人の人物と、杖をついて腰が曲がり気味の老人の土偶で、上の部分には「サムソン」と記された丸い看板のようなものがある。作家の眼は常に現代の庶民達に注がれている。

4

《土偶付き長頸壺》と《土偶付き特殊器台》の印象が僕のなかで尾を引いたもう一つの理由は、この種の表現は半島ではかなりあるが、列島ではあまり多くはないのではないかという点にあった。古代においても現代においても、だ。

古代については、ざっと調べただけだけれど、「長頸壺」や「特殊器台」に土偶のようないわば「フィギュア」を (別途造って) くっつけることは、列島では (西日本の一部を除いて？) 多くはなかったようだ。類似のもののなかで、列島で知られている例は、倉吉博物館の《装飾子持壺付

装飾器台》（註 2）や奈良国立博物館の《装飾付器台付子持壺須恵器》（註 3）くらいなものだろう（「子持壺」は小さな壺のこと）。前者には飾り馬に乗って鹿を追う人、相撲を取る 2 人、琴を弾く人物を置き、器台の縁に鳥、等を付けている。また後者の方は、4 個の小壺を肩に載せた大壺を 5 段の器台部が支える、という須恵器である。土偶はその 4 個の小壺の間に馬 2 頭、猪 1 頭、鳥 4 羽である。

つまり半島の方が「作り」として豊かなのだ。飾ろうとか、もっと何か言いたい（表現したい）とか、そういう意欲が旺盛なのである。列島のように壺や器台の表面にヘラか何かで模様を入れるだけでは、半島の人々は満足することが出来ない。半島と列島は古代から関わりが深いことは言うまでもないのだが、「十年経てば山野も変わる」のだから人も変わる。河明求は、今は日本を拠点にしているけれど、生れと育ちはやはり韓国なのである。

5

現代美術では今は素材も方法も様式も自由だが、それでも、例えば河明求のように「陶」に託して表現をするのなら、然るべき理由があるだろう。普通の陶芸（現代工芸としての陶芸）と現代美術はやはり異なるからである。

彼はこの点についても明快である。彼が古代のものを取りあげるのは、「古代」から「現在」までの「時間」を「途切れない同じ流れ」として捉え直したいからだ。もちろん時代（時の流れ）は変化を続けながら現在に到っている。一人の人間の寿命は（平均値は難しいが還暦を頼りにいえば）たかだか 60 年くらい、それが三代繋がっても途切れないのは 200 年ほどにすぎない。だが、「人間より長く存在するもの」に着目すれば、「連続性」が見えてくる筈だ。彼はそういう視点から日常の、身の回りのものに着目する。古代の陶器の形を借りて、そこに意識的に現在の日常品（スマホ、老人の杖、インターネット・メディア、ドラえもん、マスク等）を持ち込むことを通して、過去との繋がり、「文化的記憶」を彷彿とさせることができるのではないかーそれならじゅうぶん美術作品たりうる。

つまり彼の主題は、彼自身の言葉で言えば「土地の記憶」にある。人々は土地と繋がって生き死にしてゆくが、人々の代わりにいわば土地が「それ」を記憶に留める。何らかの形として記憶する。それに気付いた人（人々）が、「それ」を「土地の記憶」の中から取り出す。だから彼は「大地」、その実質である「土」を主題にする。「土」は素材でもある。

僕は、おのずと韓国の古墳文化を育んだ慶州地域の土地、自然を想い起す。あの空気と明るさと光、そしてたおやかな古墳の姿が眼に浮かぶ。

6

慶州地域の古墳を思い浮かべた僕は、またおのずと奈良や大阪を中心に広がる日本の古墳群を連想する。古墳だけを見ているとそれ程の違いはない。でも、想像のなかで俯瞰するように遠ざかっていくと、違いが、「自然条件」の違いが見えてくる。半島では（済州島を除くと）智異山でも 1900 メートル程だが、列島では山が深く、高い。簡略化して言えば、この自然環境そのものの違いが両者の「妖怪」の違いをもたらしているようにみえる。

山が高くて深ければ、平地（平野）や盆地の世界と山の世界は別の世界を形成する。その分、

「妖怪（鬼、トッケビ、超常的なもの等)」は、より人間離れしたものになる。列島の「妖怪」が一様に怖い理由の元にはそれがある。それにたいして半島では「トッケビ」は人間のすぐそば、傍らに存在している。「準人間」、「人間´」とはそういうことである。そして、傍らに居る（共に在る）のは、根本的には、人間を助けるためなのだ。

僕はこんなことを思ってみるー「人乃天」という言葉から一切の宗教的、政治的、党派的な意味を削り落してしまってみるなら、つまり「天」というのを大袈裟にしないで考えるなら、「人」こそが中心であり、「天（自然)」は「人」に寄り添う、そういうことなのではないだろうか。少なくとも河明求の作品から感じ取ることができるのはそういうこと、「トッケビと庶民の柔らかな関係」なのである。

それはそれとして、今から古墳時代まで遡ると、半島と列島（とその先の「大陸」）の関係はずっと緊密だったにちがいない。「妖怪」についても、例えば 13 例しか遺っていない（それだけ貴重な）『新羅殊異伝』を読んでも、その緊密な関係は明らかである。しかし、それから 1500 年ほどの時の流れは大きかった。西洋との関わりというまったく新しいことも生じた。僕には「近代化」は人々に幸せを齎したとは、俄かには思えない。しかも今後は、どう考えても世界の状況が良くなってゆく要素は、残念ながらあまり見当たらない。

それでも河明求は楽観的たろうとしている。半島と列島の関係に関してもだ。彼の《ドラえもん形埴輪》を僕らの顔には、自然と穏やかな笑みが浮かんでくる。

（2022 年 5 月）

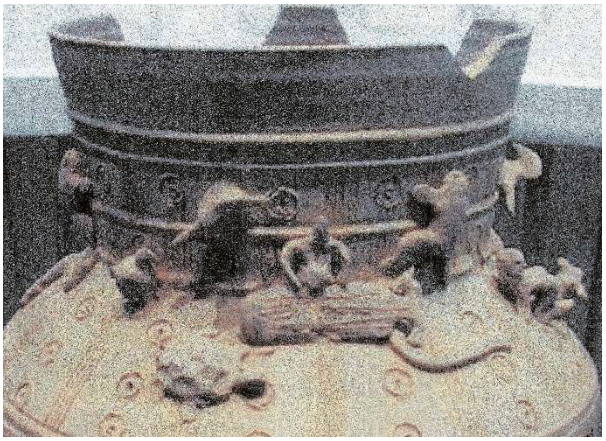
〜〜〜

註 1 :《土偶装飾長頸壺》（新羅 5〜6 世紀、高さ 34cm)。鶏林路 30　号古墳出土。

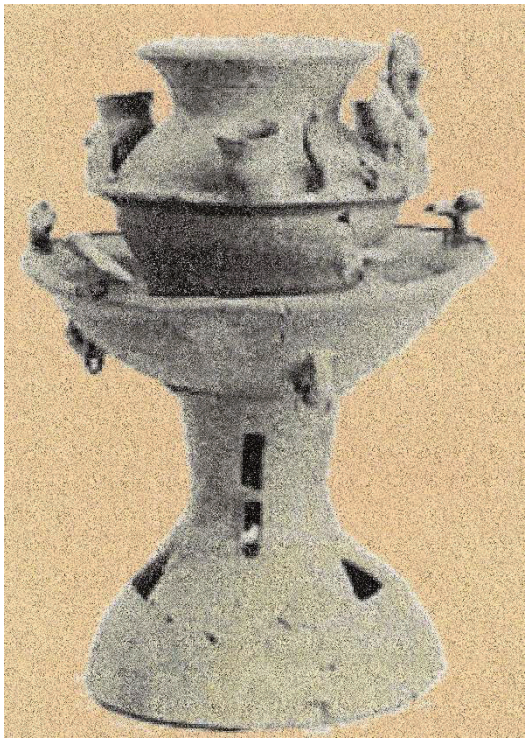
註 2 :《装飾子持壺付装飾器台》倉吉博物館蔵（6 世紀、高さ 49.5cm)。　重文。倉吉市の野口 1 号墳出土、埋葬儀礼用の土器。

註 3 :《装飾付器台付子持壺須恵器》奈良国立博物館蔵（6 世紀、高　さ 48.4cm、口径 19.3cm)。出土地不明、埋葬の供犠用の土器。

註 1



註 1



註 2

註 3

河（ハ）　明求（ミョング）

河明求（ハ・ミョング）は日本と韓国に拠点を置いて国際的な活動の幅を広げている韓国出身のアーティストであり、展示や社会などの様々な企画の経験を持っている。

韓国の慶熙大学校芸術デザイン学部を卒業後、渡日して京都市立芸術大学校美術研究科で修士課程を卒業した。

主な作品は神話、伝説、昔話などから得たインスピレーションを基に今の時代を風刺的な「ドッケビシリーズ」があり、日本埼玉県朝霞市の公式マスコット制作、日本スポーツ用品販売会社「フタバスポーツ」とのコラボなど社会的なプロジェクトの実績も認められている。

大学院の卒業後には日本の丸沼芸術の森に所属され、アーティスト活動と共に国際交流展、国際アーティストインレジデンス、国際ワークショップ、新人作家育成、海外アートフェアなど様々な企画やコーディネーターとしての活動も積極的に行っている。最近はその専門性を認められ、韓国文化体育観光部傘下韓国工芸デザイン文化振興院、駐日韓国大使館韓国文化院など政府機関主催の国際活動にも協力している。

美術のみに留まらず、社会的な様々な経験と知識を積み重ねながら、社会が必要とする専門家として成長して行くことを目標としている。

河 明求(HA Myoung-goo) Profile

●学歴

2009 慶熙大学校芸術・デザイン学部 陶芸学科 卒業（韓国）

2012 Royal college of art 陶磁・ガラス専攻 交換留学過程 修了（イギリス）

2013 京都市立芸術大学 大学院 美術研究科 工芸専攻 修士課程 卒業

現在 東京造形大学 大学院 造形研究科 博士課程 在学中

●主な個展

2014 河明求 個展「What is the perfection??」（東京・Steps gallery・**【図1】**）

2016 河明求 個展「形と用」（東京・Azabujuban gallery）

2016 河明求 個展「見えない、聞こえない、つかめない。でもたしかにあると感じること」（東京・Silver shell gallery）

2017 河明求 個展「Message hidden in humor」（東京・Azabujuban gallery）

2018 河明求 個展「Message hidden in humor」（韓国・JISO gallery）

2019 河明求 招待展（韓国・ロッテデーパト本館・アビニュエル）

2019 河明求 個展「幻の神社」（東京・Gallery Nayuta）

2020 河明求 個展「輝かしい神ドケビ」（韓国・BON gallery）

2021 河明求 個展「古代からの手紙」（埼玉・丸沼芸術の森）

2022 河明求 個展「幸せな虎さん2022」（東京・Gallery Nayuta）

●主な展示

2017 朝霞市 市制施行50周年記念展「アート×朝霞」（朝霞市立博物館）

2017 釜山ビエンナーレ「2017海の美術祭/Sea Cube/ OHASHI Hiroshi X HA Myoung-goo」（韓国・多大浦海水浴場）

2018 駐日韓国大使館韓国文化院 特別協力展示「Made in MARUNUMA 朝霞-8作家の出会い展」（東京・韓国文化院）

2019/ 2018/ 2017/ 2016 工芸トレンドフェア「海外館・丸沼芸術の森ブース」（韓国・ COEX）

2019/ 2018/ 2017 アートフェア東京（有楽町・国際フォーラム）

2019 KIAF（韓国・COEX）

2021 アンドリューワイエスと丸沼芸術の森コレクション展（岐阜県現代陶芸美術館）

2021 「But Please go on 展」（韓国・水原市立美術展示館）

2021 「萬福展」（韓国・ソウル市教育大学校美術館）

●主なプロジェクト

2015・2017 Futaba Sports オリジナルイラスト制作

2017 埼玉県朝霞市公式キャラクター「ぽぽたん」制作（原作者・**【図2】**）

2018 駐日韓国大使館韓国文化院 特別協力展示「Made in MARUNUMA 朝霞-8作家の出会い展」

コーディネーター （東京・韓国文化院）

2018 「フェルナンド・ボテロ 特別レクチャー・展示」コーディネーター （韓国・バンヤンツリークラブ＆ホテル）

2018 BAMA 海外特別展示「丸沼芸術の森ブースコーディネーター」（韓国・釜山）

2020/ 2019/ 2018/ 2017/ 2016 工芸トレンドフェア「丸沼芸術の森ブースコーディネーター」（韓国・ COEX）

【図1】ドッケビシリーズ以前に河明求が制作した過去作品イメージ
2014年度 河明求 個展「What is the perfection??」出品作（東京・Steps gallery）
（左）What is the perfection??・2014年作
（右）Pocket Square Series・2014年作

【図2】河明求がデザインした埼玉県朝霞市公式キャラクター「ぽぽたん」

河正雄コレクション 資料集　（既刊）

■第１号　関根伸夫（「もの派」作家）＝２０２０年９月発行
往復書簡／「散華」作品と原図／李禹煥「関根伸夫」論

■第２号　川田泰代（ジャーナリスト・平和活動家）＝２０２１年１月発行、３月第２刷
涼州詞と泛海詩／書がつなぐ縁／陳玉璽救援／中国との絆／評伝

■第３号　岩田　健（彫刻家）＝２０２１年４月発行
評伝「岩田健彫刻の歩み」／兄の碑／「永瀬四朗日記」と関東大震災

■第４号　江上　越（アーティスト）＝２０２１年８月発行
江上越×河正雄「コミュニケーション」／千葉成夫「江上越論」

■第５号　菊池一雄（彫刻家）＝２０２１年１０月発行
ふるさとの碑・平和の群像／浅川兄弟顕彰碑／在日韓民族慰霊塔由来碑

■第６号　千葉成夫（美術評論家）＝２０２２年１月発行
千葉成夫「河正雄論」／河正雄「美術は人なり」／インタビュー

■第７号　植松永雄（書道家）＝２０２２年４月発行
河正雄「文は人なり　書も人なり」／短歌と俳句（河正雄×植松永雄）／私の書道遍歴

河正雄コレクション　資料集　第８号

河　明求

2022 年 8 月 20 日発行

発　　行　　河 正雄

https://www.ha-jw.com/

編　　集　　菊地 正志

印刷製本　　株式会社 双信舎印刷

非売品

表紙 : 河明求「私が大好きな食べ物は悪い権力者です」　　裏表紙 :「マスク装飾人物形埴輪」

河正雄コレクション　資料集　第８号

河　明求